

<b>Title</b>	大都市における最底辺労働市場「釜ヶ崎」と日雇労働者
<b>Author</b>	松本, 義恵
<b>Citation</b>	経済学雑誌. 別冊. 99 卷 2 号
<b>Issue Date</b>	1998-10
<b>ISSN</b>	0451-6281
<b>Type</b>	Learning Material
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学経済学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 大都市における 最底辺労働市場「釜ヶ崎」と日雇労働者

松 本 義 恵

(経済学部平成9年度卒業)

指導教官 佐藤 光

## はじめに

大阪に居住あるいは通勤・通学している人で釜ヶ崎のことを知っている人はどのくらいいるだろう。恐らく、多くの人はその名を聞いたことがあるに違いない。しかし、釜ヶ崎の真の姿を知っている人はごくわずかではないだろうか。

現在の釜ヶ崎は、日雇いの仕事を「探す」場、つまり労働の拠点であり、日雇労働者たちの生活の拠点となっている。そこに生きる人たちは労働市場の最底辺におかれ、好況期には貴重な力役労働力として、不況期には使い捨ての労働力として扱われてきた。日本の経済発展にとって、労働力の調整役である彼らは不可欠な存在であり、これまで労働の存続が要請されてきたのである。

ところがこの数年、労働者と労働者を取り巻く環境が大きく変化してきた。日雇労働者の高齢化、慢性的な仕事不足、高齢者の日雇労働市場からの締め出し、「寄せ場」<sup>1)</sup>としての労働市場機能の低下、炊き出しに依存する労働者の増加、極限状態にある野宿者の増加、他区への野宿者の拡散……。しかしながら、その実態は釜ヶ崎の外からでは見えないことが多い。本稿では、そんな見えにくい釜ヶ崎という街を「労働

場」という切り口から描いてみたいと思う。そして、釜ヶ崎を拠点に働く人たちの生活や労働実態を可能な限りそこに生きる人たちの視点から捕え、釜ヶ崎における問題を考えてみたいと思う。

## 第1章 釜ヶ崎の概況<sup>2)</sup>

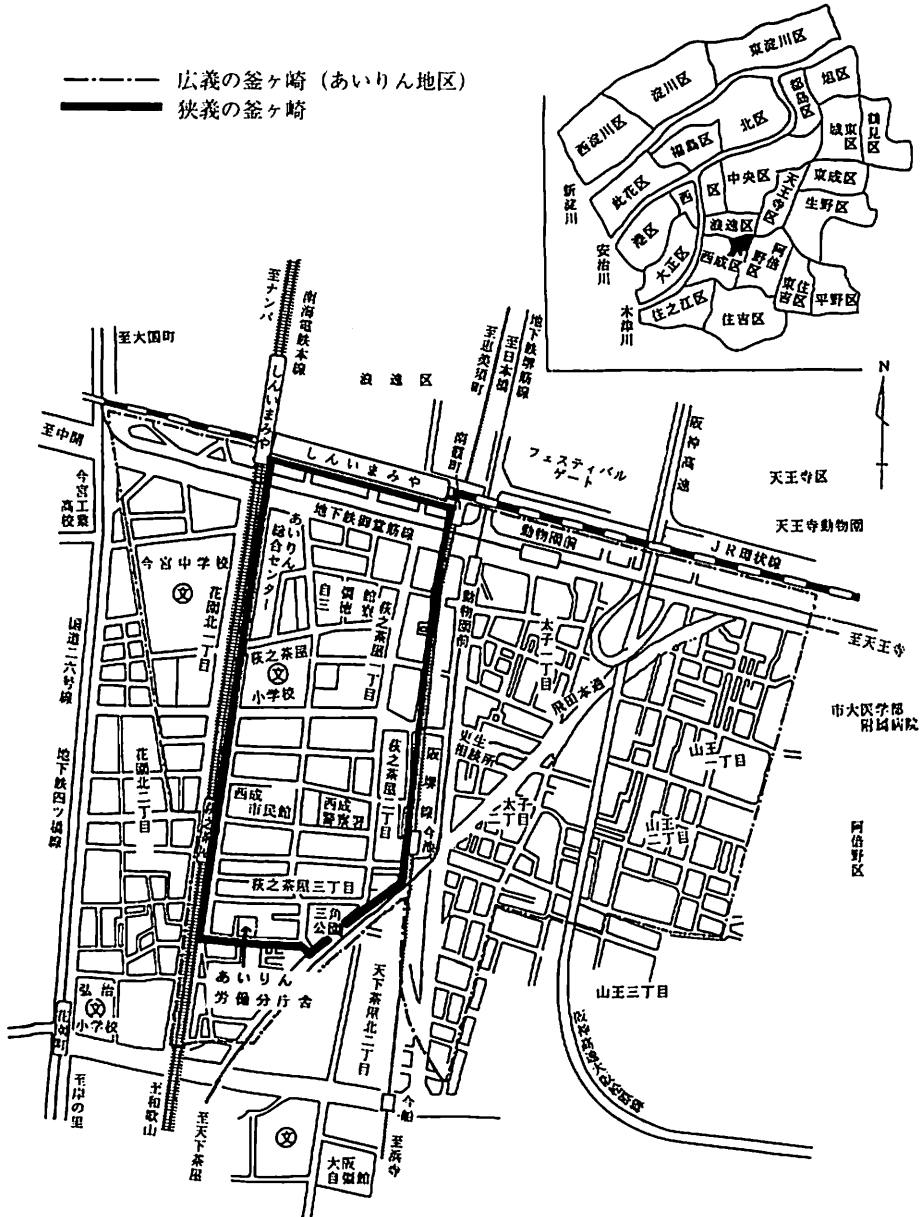
釜ヶ崎は、大阪市西成区の北東部に位置する。面積は0.62km<sup>2</sup>。西成区全体の8.4%を占めている。公共交通機関を使えば、JR環状線の新今宮駅、南海本線の新今宮駅・萩之茶屋駅、地下鉄動物園前駅・花園駅、阪堺線の南霞町駅・今池駅のいずれで下車しても近く、非常に交通の便がよい。また浪速区、天王寺区、阿倍野区に隣接しており、付近には通天閣や新世界、フェスティバルゲート、天王寺公園、旧飛田遊廓がある。

さらに、釜ヶ崎は行政施策上「あいりん地区」と呼ばれている(広義の釜ヶ崎)。現在の町丁名では、花園北1丁目(一部)・2丁目(一部)、萩之茶屋1丁目・2丁目・3丁目(一部)、天下茶屋北1丁目(一部)、太子1丁目・2丁目、山王1丁目・2丁目・3丁目(一部)

2) この章については、釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎 歴史と現在』(三一書房、1993年)および中根光敏『社会学者は2度ベルを鳴らすー閉塞する社会空間/熔解する自己ー』(松籟社、1997年)を参照した。

1) 日雇労働力が取引されている場所。労働者にとっては求職活動の場である。

図1 釜ヶ崎周辺地図



(出所) 財西成労働福祉センター「1996(平8)年度 事業の報告」第35号, 1997年5月。(一部変更)

である。この地域に日雇労働者、ドヤ<sup>3)</sup>や飲食

店・露店の経営者他、合わせて3万人近くの

3) ドヤとは簡易宿泊所のこと、宿(やど)を逆に呼んだ言葉である。一泊220円~4,500円位までである。労働者がよく利用するのは、1,500/

、円迄くらいのドヤ。釜ヶ崎には200軒ものドヤが連立している。

表1 日雇労働者の年齢別構成と推移

(単位:人, %)

	西成労働福祉センター 登録者		あいりん職安 有効日雇雇用保険手帳所持者			
	1963~1965		1984.3.31		1997.3.31	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
20歳未満	92	1.6	4	0.0	16	0.1
20歳代	2,144	37.4	261	1.7	222	1.5
30歳代	2,351	41.0	2,985	19.0	601	4.0
40歳代	824	14.4	6,563	41.9	3,768	24.9
50歳代	280	4.9	4,632	29.6	6,339	41.9
60歳以上	41	0.7	1,228	7.8	4,184	27.6
計	5,732	100%	15,673	100%	15,130	100%
平均年齢	33.9歳		46.8歳		53.7歳	

(資料) 全労連全国一般大阪府本部・西成労働福祉センター労働組合編「自立支援の新しい就労対策をめざして」、1996年10月 および あいりん労働公共職業安定所統計 より作成。

人々が居住している。大阪市内で最も人口密度の高い地域である。

「あいりん地区」の中で、日雇労働者が集中している萩之茶屋1~2丁目を中心とする地域(萩之茶屋地区<sup>4)</sup>)は、狭義の釜ヶ崎と呼ばれている所である(図1)。とりわけ本稿では、1丁目の「寄せ場」を拠点に働く日雇生活者についてみていくため、萩之茶屋地区に限定して考えてみることにする。そして以下で、釜ヶ崎と記した場合、狭義の釜ヶ崎を意味するものとする。

## 第2章 現在の「寄せ場」

### 第1節 「寄せ場」労働者の概数

日本における雇用関係には、常用・臨時・季節・日雇雇用がある。このうちの日雇雇用が釜ヶ崎の労働者の雇用形態である。

全国には、5つの大きな「寄せ場」があるが、中でも釜ヶ崎は日本最大の日雇労働市場である(労働者数 約21,000人)。次に規模の大きいのが、東京・山谷(同 約6,000人)、以下、横

浜・寿町(同 約5,000人)、川崎(同 約2,000人)、名古屋・笹島(同 約1,000人)がある。しかし、ここにあげた労働者数は、あくまでも概数である。というのも、日雇労働者には住所不定者が多いため、人数を正確に把握することが困難だからである。

釜ヶ崎における日雇労働者の年齢別構成と推移は、1963~65年については(財)西成労働福祉センター登録者数を、1984年以降は、あいりん労働公共職業安定所(以下、あいりん職安という)発行の日雇雇用保険手帳(いわゆる白手帳)所持者数を一つの目安にすることが出来る(表1)。白手帳の所持者は通常、総労働者数の2/3と考えられているため、大まかに言えば、各年代の人数の1.5倍が現在の釜ヶ崎の「寄せ場」を拠点に働く労働者数とみることが出来る。

### 第2節 「寄せ場」の雇用構造<sup>5)</sup>

釜ヶ崎において、求人活動を行っているのは、大阪府労働部の外郭団体である西成労働福祉センター(以下、センターという)である。釜ヶ崎にはあいりん職安があるが、職安は求人活動を行っていない。しかしセンターも求人者の登

4) 萩之茶屋地区は、JR環状線(北側)、阪堺線(東側)、南海本線(西側)、三角公園・あいりん労働分庁舎(南側)で囲まれた地域。

ドヤや食堂、飲み屋、露店などが立ち並び「ドヤ街」が形成されている。

5) この節については、釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎 歴史と現在』(三一書房、1993年)を参照した。

録のみで、実際には、「人夫出し業者」から送り出された「手配師」と呼ばれる求人者と労働者が直接交渉して雇用関係を結ぶ方式「**相対紹介**」が主に行われている。原則的には、このような職業紹介は労働基準法（第6条）違反である。しかし、労働省自身がこの違法な求人活動を公認しているのが実情である。

釜ヶ崎の「相対紹介」は、その就労経路により、大きく2つに分けられる。1つは「現金」、もう1つは「契約」である。

「現金」は日帰りの仕事で、朝、就職して夕方に失業する就労形態である。労働者は仕事を終えた夕方に賃金を現金で受け取る。

「契約」は一定期間（通常、10日以上）「人夫出し飯場」（作業員宿舎）に泊まり込み、そこから労働現場へ通うという就労形態である。賃金は就労日数によって支払われ、その中から契約期間の宿舎代（宿泊料、食費）が差し引かれる（契約によっては引かれない場合もある）。また「契約」仕事には、全国各地の飯場に期間を決めて出張して働く「出張」という形態もある。

さらに、「相対紹介」とは別に、日雇いには「直行」という就労形態もある。労働者自身が全国各地の末端下請と直接連絡を取って仕事を捜し、就労する形態である。一定期間、継続的に雇用されるということもあり、常用雇用と大して変わらないが、賃金はあくまでも日雇契約である。

この他、センターが「契約」仕事を紹介する「窓口紹介」もある。

### 第3節 日雇労働者の就労状況

センターの資料<sup>6)</sup>によれば、「現金」の就労状況は、昨年度、1ヵ月の平均求人90,038人、1日平均3,225人、延べ約108万人が就労してい

る。その状況を月別でみると、5月、6月の需要が特に低く、2月、3月の需要が高いという傾向を示している（図2、表2）。'95年度以前の資料を検討してみても、毎年、ほぼこれと同じ傾向を示しており、これが釜ヶ崎労働者の月別就労の特徴であるとみてよい。

これは第1に、日雇労働の現場が公共事業、特に建設業と深く結びついていることによる（図3と表3から明らかのように、センターの求人件数のおよそ96%が建設業に特化している）。4月に入ると公共工事の端境期（工期切れ）になるため求人が減少し、逆に2～3月になると予算の年度内執行のため、公共工事が増え、求人が増加することによるものである。そして第2に、建設現場での就労は天候により、左右されるためである。梅雨時期になると「土方殺すにゃ刃物はいらぬ、雨の三日も降ればよい」が現実味を帯びてくるのである。

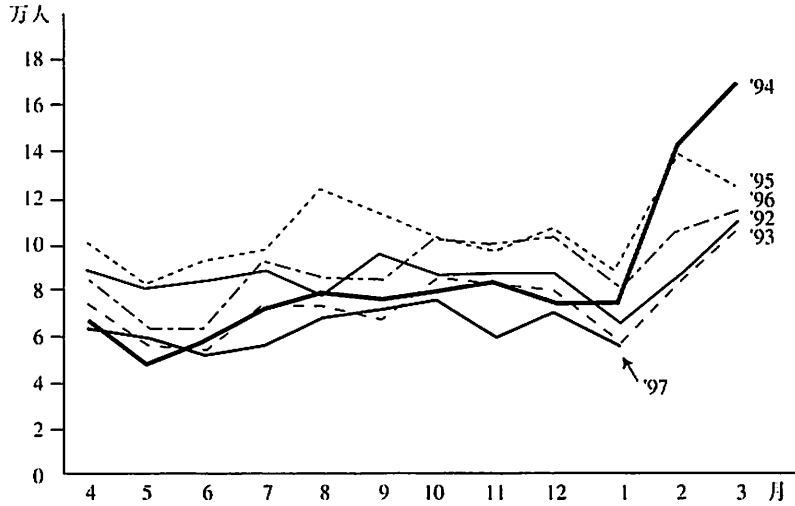
1995年1月末（'94年度）からは、1月17日に発生した阪神・淡路大震災の災害復興等の緊急工事が増加したことに伴い、一時的に日雇求人が急増した。そして震災から丸3年が経った現在の状況は、復興工事への国からの補助金が打ち切られた'97年3月末で阪神高速、国道、県道、市道の復興工事はほぼ終了し、震災関連工事の求人はない。

「契約」については、昨年度、「相対紹介」とセンターでの「窓口紹介」の両方式合わせて、延べ632,490人の紹介が行われた（相対380,526人、窓口251,964人）。前年比では、相対82.3%、窓口93.8%となっている。そして、その紹介された就労現場は様々である。大阪・兵庫・京都など近畿地方のみならず、中国・四国・東海・北陸地方など全国各地にわたっていた。

また、就労過程でのトラブルも多い。それに対し、センターでは相談窓口を設けて労働者の相談にのっている。相談内容の多くは、実際の作業内容・賃金・契約日数・宿舎の環境などが契約時の条件と異なったため、期間の途中で退

6) 助成労働福祉センター「1996（平成8）年度 事業の報告」第35号、1997年5月、4・5・35ページ。

図2 月別日雇(現金)紹介状況  
(1992~1997年度)



(資料) (財)西成労働福祉センター「1992~1996年度 事業の報告」より作成。  
1997年度については、別途センターより入手したデータをもとに作成。

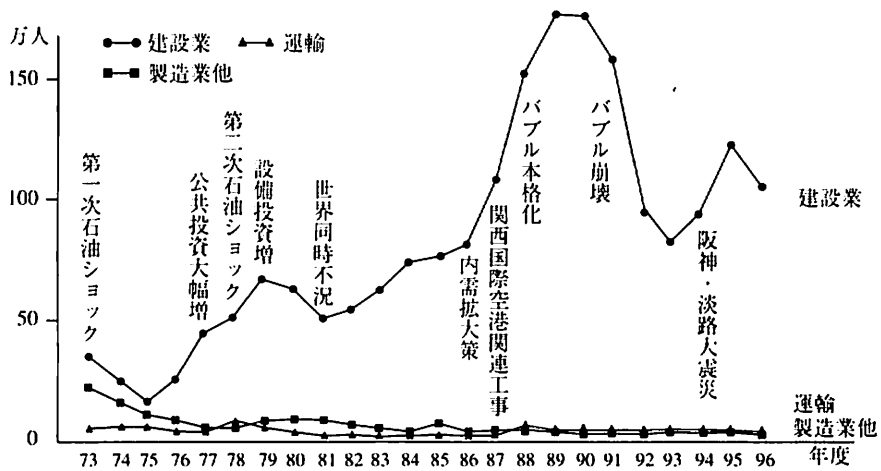
表2 月別日雇(現金)紹介状況  
(1992~1997年度)

(単位:人)

月 \ 年度	1992	1993	1994	1995	1996	1997
4月	90,001	74,707	69,402	100,450	87,999	67,194
5月	80,505	56,899	50,621	81,091	66,466	58,418
6月	82,463	53,002	58,281	91,016	64,157	52,490
7月	89,574	73,490	72,814	98,563	92,031	55,891
8月	76,837	71,291	77,070	121,713	84,809	68,775
9月	95,890	68,179	75,345	111,672	82,778	71,089
10月	88,545	86,281	78,749	105,852	101,142	75,685
11月	87,214	81,203	81,974	97,503	99,458	59,764
12月	85,570	79,969	75,433	106,441	102,485	67,825
1月	64,647	58,963	71,524	86,614	78,793	56,552
2月	85,027	80,499	144,837	135,238	105,637	
3月	107,763	105,248	165,302	124,254	114,712	
年間合計	1,034,036	899,731	1,021,352	1,260,407	1,080,467	
1ヵ月平均	86,169	74,977	85,112	105,033	90,038	63,368
1日平均	2,872	2,625	3,031	3,740	3,225	2,297

(資料) (財)西成労働福祉センター「1992~1996年度 事業の報告」より作成。  
1997年度については、別途センターより入手したデータをもとに作成。

図3 年度別・産業別・日雇（現金）紹介状況  
(1973～1996年度)



(資料) (財)西成労働福祉センター「1996(平成8)年度 事業の報告」第35号, 1997年より作成。  
各年度にその時期の特色を注記した。

表3 1996年度 産業別・日雇（現金）紹介

(単位: 件, 人)

	建設業	運輸	製造業	その他	合計
件数	88,527	4,057	2,293	1,281	96,158
人数	1,032,341	33,416	4,694	10,016	1,080,467
産業別割合	95.6%	3.1%	0.4%	0.9%	100.0%

(資料) 西成労働福祉センター「1996(平8)年度 事業の報告」第35号, 1997年より作成。

職を申し出ると賃金が未払い、あるいは不払いとなったり、健康上の理由により契約途中で退職を余儀なくされた時、賃金が未払いになったというものである。昨年度、センターが取り扱った労働相談は2,303件。その終結状況は、解決2,111件、中止192件であり、解決率は91.7%であった。

#### 第4節 労働者の一日<sup>7)</sup>

労働者の朝は非常に早い。朝4時過ぎに起き、求人用マイクロバス（「手配師」の車）の待つ「寄せ場」（あいりん総合センター）に向かう。

7) この節については、釜ヶ崎資料センター編「釜ヶ崎 歴史と現在」（三一書房、1993年）を参照しつつ、フィールドワークにより得た情報をまとめた。

センターに到着している車のフロントガラスには、賃金や職種、雇用者、作業現場、就業時間、求人数などを記載したB4サイズの紙が貼られている。これは西成労働福祉センター発行の「プラカード」と呼ばれるもので、黄色地なのが「現金」用、緑地が「契約」用となっている。労働者は、午前5時の求職開始後、この「プラカード」を見て求人条件を確認する。そして「手配師」と話をして車に乗りこむ。これで雇用契約は事実上成立する。

一般的には、このように求職活動がなされる。ところが、求人数の減少が著しい昨今は、「寄せ場」にはマイクロバスがほとんど来ていない。また来ていたとしても、「手配師」が日頃から自分の所でよく働いている馴染みの若い労働者を雇う「顔付け」が大半となっている。

「現金」は大抵6時には募集定員に達する。車は定員になり次第、出発する。「手配師」の車に乗り込んだ労働者は「手配師」の事務所を経て、現場（大手建設会社の下請か孫請会社）へ向かう。仕事を始めるのが8時頃。作業終了が17時として、賃金を受け取るために「人夫出し飯場」へ戻り、そこから釜ヶ崎に帰るのが、だいたい夜6時過ぎ。現場にもよるが、日雇労働とは実に13時間以上の拘束なのである。

但しこれは、仕事に就けた場合の労働者の一日である。仕事に就けなかった場合、あるいは仕事に行かないと決めていた日は当然のことながら各自、思い思いの時間を過ごす。

### 第3章 高齢労働者の実態

#### 第1節 労働者の高齢化と行政による 対策事業

早朝の「寄せ場」では、もう一つの光景を見ることができる。それは、就労しようとして「手配師」に話しかけた労働者が「手配師」に拒否されるという光景である。彼らは高齢者である。そして朝も7時頃になると、「寄せ場」には仕事にアブレ<sup>8)</sup>た高齢労働者が多く見られるようになる。

釜ヶ崎の労働者の平均年齢は、1997年3月末現在53.7歳。釜ヶ崎では平均年齢をわずかに越えた55歳以上を高齢者と呼んでいる。前章に掲げた表1を見てもわかるように、今後とも高齢化は進むものと考えられる。というのも、男性の単身労働者がほぼ100%を占める釜ヶ崎では、生命の再生産が行われないうちもあり、20歳未満の労働者は全体の0.1%にしかすぎない。また、若年労働者の流入もほとんど無いため、釜ヶ崎に住む労働者の加齢は、即、釜ヶ崎地域全体の高齢化につながるからである。

55歳以上で有効の日雇雇用保険手帳の所持者

8) 労働者が早朝、「寄せ場」（あいりん総合センター）に行ったものの、仕事に就けないこと。

は1997年12月末現在、7,808名（手帳所持者総数の50.8%）。雇用保険手帳の所持者は総労働者数の2/3と通常考えられているため、55歳以上の高齢労働者数は12,000名程度と推定される。

高齢労働者を就労状況からみると、「①建設現場への就労が可能な層、②建設現場への就労は困難であるが、軽作業での就労が可能な層、③軽作業への就労も困難であるが、働く意志と能力を持っている層、④要保護層」<sup>9)</sup>に分けられる。

この内、③の労働者層を中心とし、一部②の労働者層も含めた高齢者を対象として、大阪府と大阪市によって「特別清掃事業」が実施されている。事業主体は府と市であるが、仕事の出し方、作業内容、事業規模、期間、労働時間等は両者で異なっている。

大阪府は、(財)大阪府勤労者福祉協会が(株)大阪環境整備に委託し、西成労働福祉センターへ求人を出す。作業内容は、あいりん総合センター内の清掃で、1日20人雇用する。府の清掃事業は求人の方境期対策としての位置づけで、毎年、期間限定で実施されている。'97年度は6月19日から7月31日までと12月1日から翌年2月28日まで行われた。労働時間は13時45分から16時45分まで。賃金は1日5,700円である。

大阪市の場合は、西成愛隣会が社会福祉法人大阪自彊館へ委託し、西成労働福祉センターへ求人を出している。作業内容は地区内（萩之茶屋、花園北2丁目）の生活道路の清掃で、事業規模は1日20人（日曜日、祝祭日の次の日は1日26人）。期間は通年である。労働時間は10時

9) 全労連全国一般大阪府本部・西成労働福祉センター労働組合編『自立支援の新しい就労対策をめざして』、1996年10月、3ページ。

②と③にある軽作業とは、建設現場の廃材片付け、倉庫置き場の片付け、機械・部品の油洗い、道路分離帯の草抜き、道路のゴミ拾い、家庭ゴミの回収作業、ガードマン、プラカード持ち、等をいう。



から15時（昼食休憩1時間を含む）。賃金は府と同じ1日5,700円である。

両方共、紹介方法はセンターの窓口において登録した登録番号順による輪番紹介となっており、当日紹介・当日就労する。しかしながら、現在の登録者は1,249名（'98年3月31日まで有効の登録者数）となっており、現行では、登録人数と1日の求人数が折り合わず、月に1回程度しか就労出来ないのが実態である。

昨年度は8,460人の紹介に対し、就労者数は8,366人。期間全体を通してみた就労率は98.8%であった。この高い就労率は、高齢労働者の仕事に対する意欲や依存度、期待度の表れと考えられる。

### 第2節 高齢労働者の就労・生活状況

「特別清掃事業」の対象者である55歳以上の釜ヶ崎日雇労働者の内404人（55歳未満の身体障害者手帳所持者6名を含む）に対し、'96年7月12～25日、釜ヶ崎反失業連絡会（民間の活動団体）によってアンケート調査が実施された。入手した調査集計表を分析してみると、高齢労働者の苦しい就労・生活状況を垣間見ることが出来る。以下はその結果である。

アンケート対象者の平均年齢は62.7歳、最高年齢は81歳であった（図4）。

登録対象者が、55歳以上であることを考えても、平均年齢は高い。また、高齢になってもな

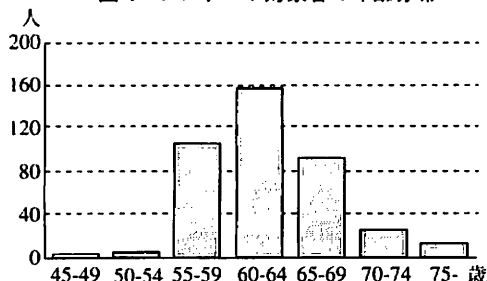
お働こうとする労働者の意欲が窺える。

「釜ヶ崎に来て何年になりますか」という質問に対しては、最小年数1年未満、最大年数50年、平均20.3年という結果が出た。

在釜年数の分布（図5）を見ると、来釜時期に顕著な特徴がみられる。3つの大きな山が出来ているのである。在釜年数より来釜時期を算出してみると、一番高い山、つまり来釜者が一番多かった時期は1966～1970年である。これは万博工事による建設労働力の吸引が行われた時期である。二番目に高い山は1976～1980年。この時期の前半は景気対策として公共事業が多く行われた時期で、労働力需要が拡大したために来釜者が増加。また後半は第二次石油ショックにより、第二次産業従事者の失業が増えたため、釜ヶ崎への流入者が増加したと考えられる。そして三番目に高い山は1986～1990年。内需拡大策が打ち出され、関西国際空港関連工事等が始まって、バブルが本格化した時期である。この時期に三たび労働力需要は拡大し、釜ヶ崎の人口は増加した。

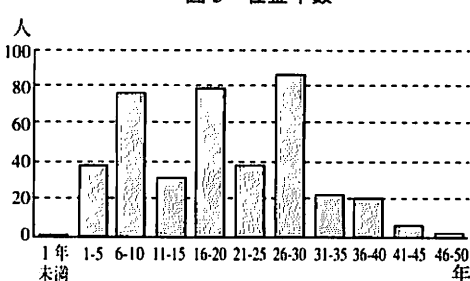
来釜年齢が50歳以上の人は全体の約3割（121名）、そのうち10年以内に来た人が77%（93名、=93/121）、そのうち5年以内は41%（38名、=38/93）にも上る。これは高齢化して釜ヶ崎に来る人が増加していることを示している。また全体の約7割は40歳代以前に来釜した人で、登録労働者の平均像は、働き盛りで釜ヶ崎に来て

図4 アンケート対象者の年齢分布



（資料）釜ヶ崎反失業連絡会アンケート集計表より作成。

図5 在釜年数



（資料）釜ヶ崎反失業連絡会アンケート集計表より作成。

高齢化した人々と言える。

次に「釜ヶ崎に来るまでに、もっとも長くした仕事はどのようなものでしたか」という質問をしたところ、一番多かったのが「建設土木」38.9% (157名)、次に、「製造」15.1% (61名)、以下「農業」7.2% (29名)、「港湾」6.4% (26名)、「造船」5.9% (24名)、「鉄鋼」4.5% (18名)、「事務職」2.7% (11名)、「炭鉱」2.5% (10名)と続いている(図6)。

そして「その期間は何年ぐらいでしたか」という質問に対しては、最短1年、最長65年、平均15.4年という結果が出た。

次に「前回の清掃事業の就労から今日まで(約1ヵ月間)に他の仕事に行きましたか」という質問をしたところ、69%(262人)の人が「1度も行けなかった」と答えており、「2回」行けた9%(33人)、「1回」行けた8%(30人)がその次に続いている(図7)。

この結果より、7月の1ヵ月間だけをとってみても、多くの高齢労働者たちは、建設現場から排除されているのが明らかである。働く意志と能力があっても、働く場がなければ、雇用保険の受給資格も得られない(2ヵ月間で26日以

上就労出来れば、翌月(3ヵ月目)からは1ヵ月につき最低13日、最高17日まで日雇労働求職者給付金(いわゆるアブレ手当)が受給できる)。そして収入が途絶えると、必然的に野宿を強いられることになる。

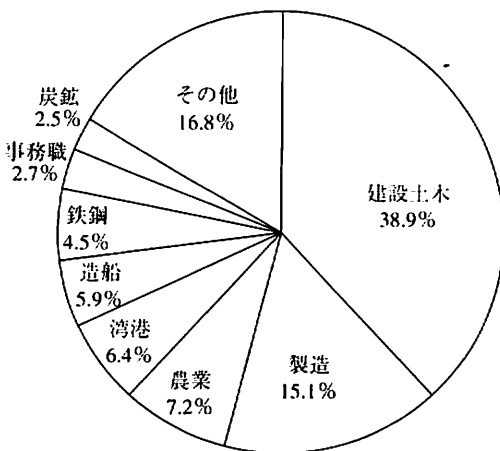
「前回の清掃事業の仕事から今日までに野宿を何回しましたか」という質問に対しては、「0回」という人が9%(38名)いるものの、半数以上の56%(226名)の人が「毎日」と答えている。この結果は、月1回清掃事業で働いて得られる賃金の5,700円が、彼らの生活の改善にはほとんど効力を持っていないことを示している。収入のほとんどは食費に充てられ、ドヤ代にまわす余裕がないと思われる。

そのような過酷な生活状況を反映してか、清掃の順番が回ってくる頻度については、回答者の40%が週3回、28%が週2回、20%が週1回、平均週2.6回を希望しており、事業規模の拡充を望む声が多い。

清掃事業で働くAさん(63歳)は言う。「週3回ぐらいは順番がまわるようにしてほしい。月1回しかまわってこんから、5,700円もろても1ヵ月で割ったら1日180円の計算や。これでは生きていかれん。清掃の番が回ってくるの、首をなごうして待ってますわ」と。

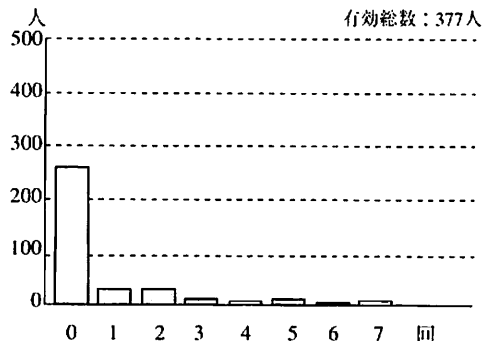
またBさん(66歳)は「どんな日もあるからねえ。雨の日とか寒い日とか……。大変やけど、

図6 最長職



(資料) 釜ヶ崎反失業連絡会アンケート集計表より作成。

図7 1ヶ月間の清掃以外の仕事の回数



(資料) 釜ヶ崎反失業連絡会アンケート集計表より作成。

年で『現金』には雇ってもらえへんし、自分の生活かかってるから一所懸命やってるわ。今まで1回も休んだことないですよ。1日働いて5,700円貰えるけど、5日しかもてへん。もちろんドヤには泊まれへん。なんとかしてほしいなあ」と言う。

この労働者たちの規模拡充の要求は、現在の彼らの生活状態を考えると、極めて切実で緊迫したものと言えよう。

今、日雇労働者たちは生きるために仕事を求めている。しかしながら、この数年、求人数の減少と厳しい就労環境のもとで、55歳前後を境に仕事に就くことが非常に困難になっている。もはや労働者の自助努力だけでは仕事の確保が難しく、高齢労働者の生活を支援する最低限度の保障が必要となってきた。「最低限度の保障」といっても、ここで私は釜ヶ崎労働者の多くを生活保護の受給者にするを意味しているのではない。最低限度の「就労の保障」によって社会の中で役割分担しつづける労働者にする、ということを目指している。このことは、社会のためにも、労働者のためにもなるのである。その意味で、清掃事業が高齢労働者支援の一助となれば、社会的効果は極めて大きなもの

になるだろう。行政は清掃事業を福祉対策としてではなく、労働対策として位置づけ、早急に雇用のあり方を見直していくべきだと考える。

#### 第4章 アブレの影響

前章でも述べたように、仕事にアブレ、収入が途絶えるとドヤ代が払えず、野宿を余儀なくされる。日雇いという労働形態は、野宿と切っても切れない関係にあるのである。

表4は、1995年から1998年の冬、ボランティア数十名と一緒に「夜回り」をして毛布やおにぎり等を配って歩いた折、野宿者数を調査したものである。それによると、昨年2月までの野宿者数は釜ヶ崎とその周辺地区だけで概ね1日500～600人であった。ところが、今年の冬は過去3年間の人数と比較しても、その数倍の野宿者数を記録した。ボランティアの人数不足により、釜ヶ崎内とその北側を中心とした地域しか巡回できなかったが、日本橋や天王寺など周辺地区まで含めると、野宿者は1,500人を越えていると思われる。

しかし、そのような野宿者の増加は、半年以上も前からある程度、予想されていた。過去3年間の野宿者数と2章であげた日雇（現金）紹

表4 「夜回り」で出会った野宿を強いられていた人数の比較  
(1995～1998年)

(単位：人)

巡回日	地区	釜ヶ崎内	釜ヶ崎北側と浪速区の一部	日本橋	天王寺	合計
1995年	1/13	274	156	224	223	877
	1/27	199	107	103	165	574
	2/17	155	99	148	128	530
1996年	1/12	168	79	168	119	534
	1/26	111	72	142	108	433
	2/16	147	89	166	105	507
1997年	1/17	188	113	168	159	628
	1/24	149	85	238	—	472 + $\alpha$
	2/21	136	51	173	—	360 + $\alpha$
1998年	1/16	990	85	—	—	1,075 + $\alpha$
	1/23	803	90	—	—	893 + $\alpha$
	2/13	834	106	314	—	1,254 + $\alpha$

(注) 数字がブランクのところはボランティアの人数不足により巡回できなかった。

介数を合わせ見ると、それら2つは負の相関関係にあることがわかる。つまり、日雇求人数の減少に伴い、野宿者が増加しているのである。そしてその関係は今年も例外ではなかった。

日雇求人数の著しい減少をみて、いち早く「緊急事態」との認識を示したのは、釜ヶ崎反失業連絡会であった。同会は昨年5月19日、大阪府・市へ対策を求めた。度重なる交渉を経て、行政は「梅雨期の緊急避難的一時措置」として6月6日から8月1日朝まで、あいりん総合センター1階オープンスペースの夜間開放の実施を決定した。行政が夜間開放に踏み切ったのは初めのことであった。その間、センター1階には900名もの人々が毎夜野宿した。

さらに大阪市は、1日800食の予定で緊急避難物資であるカンパンの支給を開始した。ところが次第に受給者が増加し、7月には1日1,200食を配ったという。「三角公園で週3回行われている炊き出しも、6月16日1,092食、18日1,750食、21日2,311食と増加」<sup>10)</sup>しつづけた。

また11月に入り、釜ヶ崎反失業連絡会および第28回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会は、大阪府・市に対して越冬対策を求めた。府庁前や市役所前等での連日の座り込み要求の末、12月19日、正式に府と市より、あいりん総合センター1階のオープンスペースの夜間開放を12月20日から年末29日朝まで、再び実施するとの回答が出された。夜間開放から1日たった21日夕方、西成労働福祉センター職員に野宿者の状況をお聞きしたところ、「この冬の野宿者は夏よりも多いです。1,000人はいます」とのことであった。

そして夜間開放が終了する12月29日からは、大阪市住之江区南港に建設した臨時宿泊所への宿泊希望者を受け付けた。定員は1,700名（昨年より400名増）であったが、実際には2,214名

もの人が宿泊したという。また例年、臨時宿泊所は12月29日から1月7日までの開設であったが、今年度に限り、日雇労働者、特に野宿者の置かれている厳しい生活状況を考慮し、1月16日まで延長された。そして16日夜からは、三たびセンター1階の夜間開放が実施された（2月末日まで）。

また、この2～3年、野宿者に関して目立った現象は、労働者たちが釜ヶ崎からも排除される傾向にあるということである。彼らは釜ヶ崎周辺、すなわち市の中心部へと押し出され、そこで野宿を余儀なくされている。それは我々が、夜、ミナミヤキタの繁華街を歩いていると、よく野宿者を見かけるようになったことでも明らかである。

さらに、釜ヶ崎にあるディアコニア・センター「喜望の家」で長年活動している人の話によると、昨年春以降、日本橋の電気屋街が開まる夜7時頃には、野宿をする場所を確保するため、釜ヶ崎から日本橋へ移動して行く労働者が目立つようになったという。以前はそんなに早い時間に移動するのを見たことがなかったようだ。これも確実に野宿に追い込まれる人が増えた証拠だと考えられる。そして野宿生活の行き着くところ、一番悲惨なパターンは「路上死」である。野宿による健康破壊により、公園や路上、ドヤで家族や親族にみとられることなく死んでいく行旅死亡人は、昨年度、大阪府で155人（内、西成区は27人）いた。ピークだった1990年度の252人（同124人）から減ってはいるが、15年前と横ばいの状態である。

一方、路上死の潜在的予備群ともいえる行旅病人<sup>11)</sup>の発生件数は年々増加している。「西成区では、1980年には3,381人であった」<sup>12)</sup>もの

10) 野宿者と釜ヶ崎労働者の人権を守る会『釜ヶ崎に光を!』第3号、1997年7月10日、1ページ。

11) 1899年に制定・公布された「行旅病人及び行旅死亡人取扱法」によるもので、行旅中病気になる、救急車などで運ばれた身元不明の人をいう。

12) 日本寄せ場学会『寄せ場』第10号、れんがノ

が、'85年6,293人、'90年6,778人、'95年8,517人、そして昨年度は9,515人と、この15年間で3倍近くにまで増えている。'95年大阪市全体では16,566人であり、西成区だけで半数以上を占めている。この実態を西成福祉事務所は、釜ヶ崎地区の労働者の高齢化と就労状況の悪化による生活困窮者の増加がその主要な原因と考えている。

## 第5章 労働者の声

### 第1節 日雇いは自由か？

1996年1月の大阪市立大学文学部社会学研究室による「都市問題に関する市民アンケート調査」<sup>13)</sup>で、「野宿している人たちに対して、あなたはどのようなイメージをお持ちですか」という質問をしたところ、回答者の27%が「自由」で「気楽」そうだと答えている。

果たして野宿生活あるいは日雇生活は、自由だと言いきれるだろうか。フィールドワークや文献等で調べてみると、自由だと述べる人は思ったよりも多い。

はじめに日雇生活者以外の声を拾ってみよう。都市社会学の研究者である青木秀男氏は、日雇生活者たちが「〈無力〉〈不満〉〈孤独〉、〈役立たず〉〈怠け者〉〈流れ者〉の〈ミジメ〉の世界」<sup>14)</sup>ばかりではなく、「〈自信〉〈自律〉〈気

楽〉、〈働き人〉〈正直者〉〈自由人〉の〈ホコリ〉の世界」<sup>15)</sup>にも住むことを強調する。

また釜ヶ崎に隣接する浪速区に住む大谷民郎氏は、釜ヶ崎をよく歩き回っている一人であるが、その彼に至っては「釜ヶ崎は天国」だと言う。「そや、ここ（釜ヶ崎）が天国や。死んで天国へ往かんでも、ここで天国の生活くらしをしとるのやさかい、何も言うことないわ。嘘で固めてええ家に住んで気イ遣うより、自分に正直な暮らし方するのがほんまの生き方と違うか。誰に気兼ねすることもない。人づきあいも税金の心配もいらん、こんな気楽なことあるかいな。」<sup>16)</sup>

また、日雇いは自由で気楽だというイメージは、日雇労働者たち自身のなかにも深く根づいている。釜ヶ崎生活25年になる水野阿修羅氏は言う。「ある日、いっしょに仕事にいった仲間が突然、『わし、あしたから働くのん、やめるわ。ヤクザにピンハネされ、資本家もうけさすの、アホらしくなったから、働くのやめるワ。アオカン（野宿）してダンボールでもひろって生きていくわ』と言い出した。釜ヶ崎にきて7年目ぐらいだった俺はガクゼンとした。『世間体』なんか気にしないほうではあったが、それでも『世間並み』を考えていた俺には、発想もつかない考えだった。正直いって負けた、と思った。俺はいまだにほしいものが多いので、ピンハネされつつ、資本家をもうけさせつつ、腹立てながらも働いている。会社のためではなく、自分のために、将来したいこともしないで今を犠牲にせず、本音で人生を楽しんでいこうとしているのが、多くの釜ヶ崎労働者だ。だから、言葉も態度もかざらない。世間はそこをとらえて、乱暴だ、汚いという。だが、慣れたら、

〳〵書房新社、1997年5月、51ページ。

13) 1996年1月、大阪市立大学文学部社会学研究室により、郵送によって実施された。対象者は、大阪市内中心部の4区（中央区、浪速区、天王寺区、西区）に居住する20歳以上の市民3,893人（選挙人名簿より無作為抽出）、および4区の民生委員、振興会役員等の役員層1,000人（各種団体役員名簿をもとに抽出）である。調査票の回収総数は2,186票、回収率44.7%であった。

全質問に対する回答の単純集計表、基本属性項目とのクロス表および調査票は、1996年3月発行の『大阪市民の野宿者に対する意識調査～現代社会の見えざる隙間～』に収録されている。

14) 青木秀男「文化としての『寄せ場』」中村祥ノ

〳〵編『社会病理学を学ぶ人のために』、世界思想社、1986年、161ページ。

15) 同上書、162ページ。

16) 竹島昌威知『釜ヶ崎天国——石島秀松伝——』、三一書房、1994年、180-181ページ。

人の話の裏を読む必要もないし、おべんちゃらもいらんし、何と気楽な街であることか、と思う」<sup>17)</sup>と。

また、一昨年の秋に出会った日雇生活者の花岡康夫さん（54歳）も、私の「日雇いということに対する不安はありませんか？」という質問に対し、「失業の不安はもちろんある。けど、人間、楽天的に出来てるもんや。なんとかなる」と答えてくれた。そして「仕事は行きたい時だけ行って、のんびりしたい時は休む。一旦、この仕事をやると、こんな自由な生活はやめられへん」とも言っていた。

さらに、「都市の野宿者の生活実態調査」<sup>18)</sup>で、36歳のある人は「(この生活に)甘んじているわけではないが、気楽は気楽」と言い、また別の人も「やっぱりねー、もう気楽でしょ。確かにこれはねー。もう自分のことだけやとりゃええんやから」と日雇いの気楽さを強調する。どうやら、日雇いが自由で気楽だという意識は、日雇労働者自身のなかにも存在するのは間違いないと思われる。

しかし、気楽だと述べていた水野阿修羅氏は、後年、自らの著書の中で次のようにも述べている。「実際に働いている時は、パラダイス意識なんてふっとんでしまうほどしんどいことが多い。毎年、真夏日や真冬日になると、何でこんなしんどい仕事をしているんだろうと思う。他の人たちが冷房や暖房のきいた室内で働いているとき、ひっくり返りそうな暑さの中で、指の先が痛くて感覚を失うほどの寒さの中で働いていると、とても『その日暮らしはパラダイス』なんていってられない。」<sup>19)</sup>これがおそらく

労働者たちの本音であろう。

日雇いは肩書きを捨て、過去を問われない。人間関係や人づき合いの煩わしさもない。精神的な自由がある。おまけに稼いだ金は全部自分のもの。これらを捕えて「釜ヶ崎は天国」<sup>パラダイス</sup>だと言うのもわからないでもない。しかし私には、市民たちが「野宿者は自由」だと述べたのは、市民たちがあまりにも過激な競争社会に身をおいているがゆえに、市民自身の自由への羨望を野宿者に投影した結果ではないかと思える。雇用者にとって、「寄せ場」とは人手が必要な時だけ必要な数を得る場所である。日雇労働者は、毎日、仕事に行くか行かないかを選択できる自由や体一つで仕事に就ける自由を持つ代わりに、「(寄せ場)に出たとしても)仕事に就けない自由」、「飢える自由」も同時に背負いこまされるのである。長期に及ぶ野宿の末、体調を崩し、釜ヶ崎の中で路上死する人が毎年100人を数えるのも現実の姿である。彼らを自由人ととらえた市民には、「苦しむ自由」が見えているのだろうか。

日雇生活者の状況を日雇生活をしていない側の認識だけで勝手に判断し、決めつけるのはどうかと思うが、私には、日雇生活者たち自身が「日雇生活は自由」だと述べるのは、何とかして、少しでも自分の生活に肯定的な意味を見出そうとする彼らの意識の現れであり、一種の見栄や強がりにしか思えない。人は誰でも暖かい家庭や心休まる場を求めるはずである。それを何らかの事情で失ってしまった単身日雇生活者たちは、彼らに常に付いて回る孤独や不安を隠すために、また日雇生活者同士が互いに励まし合い、支え合うために、あるいは自らを勇気づけるために、敢えて「自由」だと言わなければ、むしろ生きていけないのではないかと思う。彼ら自身が「自由」だと言うことにより、「日雇

17) 元気マガジン編『釜ヶ崎ストーリー』、ブレンセンセンター、1989年、58-59ページ。

18) 1995年、大阪市立大学文学部社会学研究室が「社会調査実習」の一環として、大阪市の中心部（難波、天王寺、大阪城公園周辺など）で野宿をしている人 236名に対し、面接聞き取り調査をしたもの。

19) 水野阿修羅『その日暮らしはパラダイス』、ビレッジプレス、1997年、171ページ。

いは自由」だという言説が世間に広まっているようだが、日雇生活は傍でみているほど「自由」で「気楽」とは言えない。それはこれまで面接聞き取りをした日雇生活者たちの人生を見るとよくわかる。次節では、ヒアリングをした中からY.N.さんのケースを取り上げて見てみたいと思う。

## 第2節 Y.N.さんの日雇人生

### —面接聞き取り調査より—

日本のエネルギー需要の比重が石炭から石油へ変わってくる1960年頃から釜ヶ崎の人口は増加した。石油の輸入量の増加につれて炭鉱は次々と廃鉱に追い込まれ、最盛期に300万人以上いた炭鉱労働者は失業を強いられた。失業者は生活保護を受けるか、炭鉱を離れ日雇いの仕事を始めるか、選択肢は多くなかった。

Y.N.さん(男性)も、そんな炭鉱失業者の一人だった。関西に出て来た当時、30歳だったNさんも、今ではもう67歳になろうとしている。現在、彼は大阪市北区にある更生施設、大阪市立大淀寮で生活している。昨年5月の最終土曜日、私は大淀寮を訪ね、Nさんにお会いして話をお伺いする機会を得た。(その後、12月末にも追加的に面談を実施した。)その時の話を通して、彼が最終的に釜ヶ崎にたどり着いた経緯、日雇いの不自由さ、また今の釜ヶ崎の人間群像をみてみたいと思う。

まず初めに、Nさんの生活史をみてみよう。

1931年(0歳) 福岡県田川郡(筑豊炭田の一部をなす炭鉱町)で4人兄弟の長男として生まれる。当時、父親は三井炭鉱他で炭鉱労働に従事。父親の仕事の関係で、小学校は6回転校した。友だちの親は炭鉱労働者が多かった。

1937年(6歳) 母親を事故で亡くす。父親が再婚。

学校から帰宅すると子守をして継母を助けた。

1943年(12歳) 第2次世界大戦に伴う学徒動員で八幡製鉄所へ。最初、飛行機を作るというので、喜んで行ったが、実際に行ってみると、飛行機のプロペラを回すベルトの製造をする部門だった。

1945年(14歳) 終戦とともに、三菱系列の古河工業へ就職し、機械の修理工となる。父親がNさんの給料を前借りしていたため、就職後も給料をほとんど手にしなかった。

1947年(16歳) この頃は、戦後復興のために石炭の増産が叫ばれ、人海戦術がとられて炭鉱へ人がどっと流れ込んだ時代であった。

Nさんもすぐ下の弟と共に田川郡のT炭鉱へ。そこは300人余りの坑夫を使う小規模炭鉱で、Nさんは最初の2年間、機械修理を担当。1日8時間、3交代制、週6日勤務、内1日は24時間労働であった。その後、機械修理の2倍給料をもらえるという掘進夫<sup>20)</sup>となる。

田川での10年間は非常に忙しく、1日2~3時間しか寝られないことも多かった。炭鉱では、給料も食事も与えられ、待遇は良かった。

20) 炭鉱で石炭を掘る仕事をする人のこと。

Nさんによれば、炭鉱では明確に仕事分担がされていたという。石炭を掘る人(掘進夫)、掘られた石炭を車両に積む人、脇道を作る人、柱を立てる人、囲いをする人、地面を掘って地盤を下げる人、土手を作る人、機械修理をする人、等である。そして給料は各担当によって異なっていたようだ。

- この当時の給料は全て一家の生活費に充てられた。
- 1956年(25歳) エネルギー政策の転換により、この頃より石油の輸入が始まる。それに伴い、4月、T炭鉱は閉山。他の炭鉱へ移る。しかし、どの炭鉱も経営難に陥っていた。そのしわ寄せは労働者に及び、給料の30%が「金券」<sup>21)</sup>で支給された。
- 1957年(26歳) 継母と折り合いが悪くなり、家を出る。
- 1958年(27歳) 同棲。
- 1959年(28歳) 内縁の妻と子(1歳)を事故で亡くす。
- 1961年(30歳) 1950年代末から各地で炭鉱の閉山が相次ぎ、これ以上、坑夫として働くことは無理だと判断。近所の人からの誘いもあって、友人3人と職を求めて奈良へ靴一つつけて出てきた。プラスチック製品の製造会社(家内工業)へ就職。この当時の貯金はゼロ。アパートと3度の食事は、会社が用意してくれた。この頃から実家には連絡をしなくなったが、兄弟とは頻りに連絡を取り、会ったりもしていた。
- 1963年(32歳) 勤め先の会社の経営状態が悪く、次第に給料の支払いが途絶えるようになった。それまで社長夫婦が良くしてくれたので、不満を言えないでいたが、このままでは生活していけないと思い、九州へ戻ることにした。福岡にある小さな炭鉱で働き始める。無煙炭を掘る炭鉱だった。
- 1964年(33歳) 再び仕事の誘いがあり、奈良県王子町へ。履物問屋へ就職。
- 1966年(35歳) 当時、1ヵ月の給料は28,000円と安く、食べるのがやっとという生活だったため、履物問屋を退職。王子町にいる友人がしているプロパンガスの配管の仕事を手伝うようになる。
- 1969年(38歳) 大阪市内(桜ノ宮)で水道の配管工事の仕事に就く。
- 1973年(42歳) この頃から仕事を求めて「寄せ場」釜ヶ崎へ出入りするようになる。日立造船・堺工場を始め、全国各地の造船・鉄鋼会社で配管工事に従事。当時の日当は5,400円程度で、生活は比較的安定していた。この頃、2回(計7年)アパートを借りたこともある。野宿経験は一度もない。釜ヶ崎へ来てからは、兄弟とも連絡を取らなくなった。(今では兄弟の消息もわからない。)
- 1990年(59歳) 6月、入院(70日間)。胃の4分の3を切除。酒の飲みすぎと出張先(飯場)での人間関係による精神的な疲れが体を壊した原因という。退院後は、貯金が5万円位あったため、1週間ドヤで静養。その後すぐ働き始める。愛知県知多半島にある火力発電所で

21) 金券とは、炭鉱内の売店のみで使用可能な一種の商品券とも言うべきものであった。現実には疑うべくもない私幣で、この私幣が乱発されたら最後、労働者の生活は破滅に追い込まれる。というのも、金券は売店にしか通用しないため、売店に納品する業者たちは、金券の発行と同時に一切の生活必需品を納めなくなってしまうからである。



配管の仕事を始める。退院後の身体の状態は芳しくなかったが、食べていくためには仕方がなかったという。

退院後も月平均20日以上は働いた。

1995年(64歳) 加齢に伴い、この頃の配管工事の日当は16,000円にまで下がっていた。12月25日まで仕事を続けるが、再び体の不調を訴え、仕事を辞める。大阪社会医療センターへ通院。

1996年(65歳) 4月初め、配管の仕事に復帰しようとしたが、仕事がなく、西成の飯場で仮枠大工の仕事に就く。

4月中頃、三たび体を壊し、大阪市立更生相談所へ相談に行く。6月1日、更生相談所附設一時保護所経由で更生施設である大阪市立大淀寮に入所。

1998年(67歳) 現在は、通院・治療に励んでいる。

このNさんの人生は、釜ヶ崎へたどり着く典型的なパターンの一つである。炭鉱の閉山により、1961年(Nさん30歳)就職のために関西へ。奈良で製造業に従事する。しかしその仕事も2年で辞め、九州へ戻っている。33歳の時、再び関西に来、履物問屋に就職するが、これもまた2年で辞めてしまっている。そしてまた就職。釜ヶ崎の労働者の場合、来釜するまでに4~5回転職しているのが平均的である。そして一般的に転職を重ねるに従い、益々不安定な職業へと追いやられる。Nさんの場合も例外ではなかった。転職を繰り返した後に日雇生活が始まった。1973年(Nさん42歳)頃からは、日雇いで、造船・鉄鋼会社等、職場は何度も変わっているが、一貫して配管関係の仕事をするよう

になった。それでも健康で、仕事の出来るうちは良かった。日雇労働者にとっては、健康を害し、働けなくなった時が最悪である。西成区では、住所不定者には生活扶助等の生活保護による福祉の救済措置の例が未だない。それ故、Nさんも体調が完全に回復していないにも拘わらず、日々の糧を得るために働き始めなければならなかったのだ。そして再び体を壊し、生命の存続が危ぶまれるまでに追い詰められたNさんに対して取られた措置が、更生施設への収容保護であった。

振り返ってみると、彼の仕事の場合は日本の経済発展に伴う産業構造の変化の中で、衰退する産業の中に置かれた。防御し、対抗する生活力や集団の組織力を持たず、40歳を過ぎた頃から一人ドヤに寝泊まりして日雇生活を送るようになった。そのような生活に至るには、社会経済的な要因があるにせよ、それとは別にもう一つ見ておくべきことがある。それは、伝統的な支援機能である血縁(家族)関係や釜ヶ崎で築き上げた地縁関係等の側面である。

彼は幼少の頃から人間関係に恵まれなかった。母親とは6歳の時に死に別れ、継母とはうまくいかず、後年には妻と子を事故で亡くしている。また小さい時は学校へも行けず、病気で倒れた父に代わって、家計を支えてきた。彼は相次ぐ不運のために、立ち直るきっかけさえも逃してしまったのではないだろうか。単身で関西へ出てくることになったのも、故郷に彼を留まらせる「何か」が無かったためであろう。その「何か」とは、おそらく自分を受け入れてくれる人、自分を支えてくれる人、自分が所属する場といったものであろう。親、兄弟、妻、子どもなど、彼をつなぎとめるものが一つでもあれば、彼は関西へ出てくることはなかっただろうし、後に日雇生活をするにもならなかっただろう。身近な人間関係の崩壊で、彼は「居場所」を失ったのではないだろうか。

Nさんは、「西成<sup>22)</sup>の方には、いい友人が

るんです。入所したことは、知らせると心配するから、わざと知らせてません。身体さえ良くなったら、すぐここ（施設）を出て、これまで支え合ってきた友人のために西成へ戻りたいと思ってます」と言う。病気が治ったら、釜ヶ崎へ戻らず、別の所で仕事を探せばいいじゃないかと普通の人は考えるかもしれない。しかし、住所も身元保証人もいない人には日雇いしか道はないのである。但し、そこは住所も身元も求められない代わりに、何の保障も得られないが……。

労働者たちは言う。

「なんせ、住所不定っていうのが一番こわいんですよね。住所不定っていうのがね。どこいっても、つこうてくれんですわ。それが一番つらいですね。」

「社会的に受けつけないわけですよ、……色々あるからね、履歴書書かなきゃいけないしね。保証人とか、何とか、いろいろいるからね。普通の一般会社のあれはね。」

また、ある人は言う「西成おってドボツとつかってしもうたら、もうよそへは行かれへん」と。確かに、彼の言うように一旦、日雇いの世界に入ると、そこから抜け出すことは至難の業である。それは何故か。「よそ行くいうたって、最低でも50（万円）はいる。アパート借りたりね。一ヵ月分の生活費はどうしてもいる。西成におったら、その日その日で今日一銭もなかって明くる日仕事いってたら、仕事ありゃー、朝に千円借りて、昼に千円借りて、帰しなその金引いてもろて、そやから一銭もなしでも暮らせんのよ、西成というところは。仕事さえ行けたら。そやけどよそ行ったら、そんなわけにはいかへん。一旦、西成にドボツとつかってしもた人間は、よそで再生せーいうほうが無理や。」

（傍点引用者）<sup>23)</sup>これが理由である。しかし昨今は、釜ヶ崎から抜け出すことはおろか、その日暮らしをするために不可欠な仕事さえないのである。特に高齢労働者や体力の低下した野宿者には。

最後に、Nさんに今後の見通しについてお伺いしたところ、「なるべく早く西成から逃げ出したい。最近、身体が良くなってきたから、もう少ししたら通いで働きに出ようと思ってます。あと一年で60万円くらい貯めて、（退所後は）アパートを借りて暮らしたい。そして70までは、自分の好きな機械関係の仕事をして働きたいと思ってます。そう70歳まではね。好きな仕事をしながら、田舎に引っ込む金が作れたら、九州に帰って、小さい頃から好きだった釣りをしたり、近所の人たちと助け合ったりしてのんびり過ごしたい」と語ってくれた。

私はNさんの「なるべく早く西成から逃げ出したい」という言葉が引っかかった。つい先程まで、「これまで支え合ってきた友人のために西成へ戻りたい」と言っていた彼だったが、本音ではやはり逃げ出したいと思っていたのか。そこで、私はNさんになぜ釜ヶ崎から逃げ出したいのか、あえて聞いてみた。Nさんは「西成の人間の仕事に対する姿勢が嫌いだから」という。

釜ヶ崎での仕事は、きつい仕事が多い。建設土木や港湾といった肉体労働や汚れる仕事、危険な仕事も多い。「手配師」や「入夫出し業者」の中間搾取で、仕事の割に賃金も安い。年金や身寄り等、老後の保障もない。だから仕事で手を抜く。会社人間の癖が抜けない釜ヶ崎新入生が一所懸命働いていると、大抵誰か釜ヶ崎生活の長い先輩が、こんな風に言うという。「そんな一所懸命働いたらあかんで。自分の体、壊し

22) 「大阪市西成区」の略称。釜ヶ崎の通称の一つとしても使われている。釜ヶ崎労働者自身が自分たちの街をこう呼ぶことが多い。

23) 大阪市立大学文学部社会学研究室「大阪における野宿者と高齢日雇労働者～1996釜ヶ崎の人間群像～」、1997年3月、3ページ。

たら何もならん。俺たち日雇いや。明日の仕事も残しとかなあかん。一所懸命やったら、明日の仕事なくなるで。適当に、適当にな……。」一所懸命働いて、会社で認められ、それ相当の金を貰おうという、現代の日本人（常用雇用）の労働観からすれば、とても受け入れられない感覚である。今や多くのサラリーマンが陥っている働き方の対極に位置するともいえるこのような考え方の労働者は、釜ヶ崎に多いという。これは日雇労働者ゆえ、体が資本の肉体労働者ゆえの発想かもしれない。ところがNさんには、こんな労働者の仕事に対する姿勢は許し難いようだ。

Nさんにとって釜ヶ崎とは、自ら選んで向かった場所ではなく、就職口がなく、差し当たり今日の仕事を見つけるため、なんとなく流れついた場所であった。彼が70歳になるまであと3年、大淀寮退所後は再び釜ヶ崎をベースに生活をするのだろうか。そして数年後には、釜ヶ崎から「逃げ出す」のだろうか。あるいはまた、そこはNさんにとって計らずも、他の多くの帰郷先を持たない釜ヶ崎の労働者と同じく「最終的な場所」となるのであろうか。

お正月やお盆になると、全国の飯場から釜ヶ崎に帰ってくる多くの労働者がいる。彼らにとっては、釜ヶ崎こそ「ふるさと」なのである。Nさんは、老後はふるさとの九州に帰り、のんびりと落ち着いた生活を送りたいと言っていたが、私は彼がずっと釜ヶ崎に住み着くのではないかと思っている。それは、Nさんが自力で日雇いの世界から抜け出せないからというわけではない。彼を釜ヶ崎につなぎ止めるものが今はあると思うからだ。Nさんは、それまでもっていた家族という支援機能、つまり、親、兄弟、妻、子ども……全てをなくし、故郷を出、後に釜ヶ崎という社会の中で生き始めた。そしてそこで、新たな人間関係や社会関係を構築した。彼を釜ヶ崎につなぎとめるものが今あるとすれば、新たに築き上げた関係の中にあると考えら

れよう。Nさんによれば、ドヤでは同業種の仲間との助け合いで生活が成り立っていたという。仲間が困っていると、返金を期待せず、お金を貸す。仲間のためなら、自分は食べるのも我慢する。限りある仕事は分けあって必要以上には働かない。そんな仲間の存在が、Nさんを釜ヶ崎に引き止めるのではないだろうか。そして、そんな仲間のいる釜ヶ崎は、Nさんの「居場所」であり、今では彼にとっても「ふるさと」になっているのではないだろうか。

### 最終章 今なお変わることのない 釜ヶ崎に思いを馳せて

この最終章では、社会の奈落をそのもっとも広い見地に立って眺め、文明に対していくつかの質問を投げかけてみるのがいいだろう。その答えしだいでは、文明は存亡をかけねばならない。たとえば、文明は人間の運命を改善したか？「人間」という言葉を、私は民主主義的な意味、つまり普通の人間という意味で使っている。だから、この質問はこんなふうに言いなおされる。文明は普通の人間の運命を改善したか？

—J. ロンドン<sup>24)</sup>

今の世の中には、奪われた人生を生きざるを得なかった人々の存在になど全く思い至らないで、苦しい状況にある人々を見て、何度もチャンスはあっただろうに努力しないから自業自得でそうなったのだと何も知らずに決めつけてしまう傾向がある。日雇労働者となり、更には野宿せざるを得なくなったのは、全て本人の責任だから仕方がないとみなし、それを正当化してしまうのである。

昨年10月、『産経新聞』が「ホームレス問題を考える」をテーマに論文を募集し、その入選論文が12月2日付けの同新聞に掲載されていた。入選者の浅野百合子さん（東京都在住、主婦）

24) London, J., *The People of the Abyss*, 1903.  
(辻井栄滋訳『どん底のひとびと』, 社会思想社, 1985年, 271ページ。)

も、ホームレスとなったのは自業自得だと述べている。「なぜ日本のような経済大国でホームレスが発生するのか、その理由を素直に考えてみたい。私には、一部の例をのぞけば、本人がまじめに働きたがらないからだ、としか思えない。今の経済状況は、一般に不景気だと言われるが、それでも少なくとも求人需要はあり、少ない賃金であっても本人に働く気さえあれば、毎日の食事には困らないはずだ。（中略）本人の意欲と努力があれば、ホームレスになることなく別の道が開けるようになっている。落ちぶれたとはいえ、日本経済は、まだそのくらいの体力は持っている。したがって、サラリーマンの妻である私のような一般庶民の目から見れば、現在、（東京・新宿駅）西口で生活している人々は、自分が好き好んでホームレスとしての道をあえて選択していると思えないふしがある。要するに、自分なりの哲学で現在の生活をエンジョイしているようだ。」

また、もう一人の入選者、吉野順三さん（東京都在住、建築デザイン業）も「ホームレスのなかには、おのおのに事情を抱えていてそれなりの努力はしてみたものの、やむなくホームレスに落ち着いてしまった人もいるだろう。しかし、それは多数ではないような気がする。今の時代、まじめにさえやっていたら何をしたら自分一人の生活ぐらい維持できるはずだ。社会や他人のせいにするのは、筋違いだと思う」と述べている。

「都市問題に関する市民アンケート調査」<sup>25)</sup>結果を見ても、一般市民は野宿生活者を「怠け者」(48%)で「無気力」(54%)（複数回答）だとみており、「どこに問題があって、野宿している人は路上で寝なければいけないと思いますか」という質問に対しては、87%の人が「本人」の責任だと答えている。

しかし、果たしてそうなのは、本人だけ

の「責任」だろうか。彼らの多くは、遠く故郷を離れ、家族と別れ、身寄りもなくなった一人でドヤに泊まり、日雇いという不安定雇用の中で、日々失業の機会にさらされながら生活している。そのような生活をするようになったのは、ほんの些細な出来事がきっかけであったり、おそらく本人たちも気づかないうちに、日本経済のしわ寄せを受けてきたためである。大企業と中小企業の併存という日本経済の二重構造の中で、釜ヶ崎の労働者の多くは、経済的不平等や二重構造のしわ寄せを転職の過程で受けてきた。そして結果として、戦後、造船や港湾、炭鉱労働に従事し、失業して釜ヶ崎へ流入してきた人、農閑期に出稼ぎに来てそのまま釜ヶ崎に居残ってしまった人、都市の雑業を請け負っているうちに失業し、職を求めて最終的に釜ヶ崎にたどり着いた人など様々な理由で釜ヶ崎に来、そこを拠点に就業することになった人たちが、日本の最底辺の仕事の担い、日本の経済発展を底辺から支えることになってしまったのである。過去20年の産業別の雇用状況（第2章：図3）をみてもわかるように、釜ヶ崎労働者の職場の業種は建設業が中心であった。高度経済成長期以来、一般の人が敬遠するいわゆる3K職種を彼らが担うことで、日本の労働市場は支えられてきた。そして現在もなお、彼らの存在なくしては、日本の社会は成り立たないのである。

釜ヶ崎に足を踏み入れるまで、釜ヶ崎とはスラムという汚く、暗く、悪いイメージしか私にはなかった。しかし、実際の釜ヶ崎は決してスラムではなく、「寄せ場」であり、苦しい状況の中にあっても生き抜いていこうとする人々の姿がある。強さと忍耐力、そして勇気をもった人が本当に多く生活している。釜ヶ崎は間違いなく、人間社会なのである。それを思う時、先のロンドンの言葉は実に示唆に富んでいる。彼があのかいを投げかけたのは100年近くも前のことである。ロンドンが生きた時代より後の100年、つまり20世紀は、過去にも増して文明

25) 大阪市立大学、前掲書（注13）、153ページ。

の加速度的な進歩が人間を豊かにし、健康で快適な文化的生活を可能にした。またその一方で、この100年の間に豊かさは文化的な生活から排除された人々のことを無視させることにもなった。豊かになったと言われる日本で、今なお、変わることのない釜ヶ崎の現状を見るにつけ、今一度、問い直してみる必要があるのではないだろうか。「文明は普通の人間の運命を改善したか？」(傍点引用者)と。

## 参考文献

## 文 献

- [1] 青木秀男「文化としての『寄せ場』」中村祥一編『社会病理学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1986年。
- [2] 上野英信「追われゆく坑夫たち」, 岩波書店, 1960年。
- [3] 大阪市立大学文学部社会学教室「大阪市民の野宿者に対する意識調査～現代社会の見えざる隙間～」, 1996年3月。
- [4] 大阪市立大学文学部社会学教室「大阪における野宿者と高齢日雇労働者～1996釜ヶ崎の人間群像～」, 1997年3月。
- [5] 川端直正編「西成区史」, 西成区市域編入40周年記念事業委員会, 1968年。
- [6] 釜ヶ崎資料センター編「釜ヶ崎 歴史と現在」, 三一書房, 1993年。
- [7] 元気マガジン編「釜ヶ崎ストーリー」, プレエンセンター, 1989年。
- [8] 社会構造研究会「あいりん地域日雇労働者調査」, 1997年3月。
- [9] 杉原薫・玉井金五編「大正/大阪/スラムーもうひとつの日本近代史——」, 新評論, 1986年, 増補版, 1996年。
- [10] 全労連全国一般大阪府本部・西成労働福祉センター労働組合編「自立支援の新しい就労対策をめざして」, 1996年10月。
- [11] 竹島昌威知「釜ヶ崎天国——石島秀松伝——」, 三一書房, 1994年。
- [12] 中根光敏「社会学者は2度ベルを鳴らす——閉塞する社会空間/熔解する自己——」, 松籟社, 1997年。
- [13] 日本寄せ場学会「寄せ場」第10号, れんが書房新社, 1997年5月。
- [14] 水野阿修羅「その日ぐらしはパラダイス」, ビレッジプレス, 1997年。
- [15] London, J., *The People of the Abyss*, 1903. (辻井栄滋訳「どん底のひとびと」, 社会思想社, 1985年。)

## 定期刊行物

- [16] 財西成労働福祉センター「1992(平4)年度事業の報告」第31号, 1993年8月。
- [17] 財西成労働福祉センター「1993(平5)年度事業の報告」第32号, 1994年8月。
- [18] 財西成労働福祉センター「1994(平6)年度事業の報告」第33号, 1995年9月。
- [19] 財西成労働福祉センター「1995(平7)年度事業の報告」第34号, 1996年5月。
- [20] 財西成労働福祉センター「1996(平8)年度事業の報告」第35号, 1997年5月。
- [21] 野宿者と釜ヶ崎労働者の人権を守る会「釜ヶ崎に光を!」第3号, 1997年7月10日。
- [22] 野宿者と釜ヶ崎労働者の人権を守る会「釜ヶ崎と人権」第5号, 1998年1月10日。

## 新 聞

- [23] 「産経新聞」1997年12月2日。